

# 私の望む沖縄の未来

沖縄尚学高等学校附属中学校 1年生 盛田 葵生

海、自然、癒し、沖縄のイメージでよく耳にする言葉です。

そのイメージを求めて、沖縄には毎年たくさんの観光客が訪れます。人口が約一四四万人の沖縄県にとって、観光産業は経済の要とも言えます。

平成二九年度の観光客数は約九百三十九万六千二百人で年々増加傾向にあり、そこには多くの外国人観光客も含まれています。大型クルーズ船などで、一度に大勢で訪れる外国人観光客の存在は大きく、経済的に支えられている部分も大きいと思います。

しかし、それも良い事ばかりではなく、団体ツアーでホテルの部屋が埋まってしまい、国内観光客のホテル代が値上がりしてしまうという問題もあるそうです。たくさん観光客が来てくれるなら、国内も海外も同じことなのではないかと思いますが、海外の団体ツアーは格安なものも多く、宿泊費も通常より安く設定されているそうです。この安売り観光は、海外だけでなく国内も含めて沖縄観光の課題となっています。

私は、両親にも沖縄の観光について意見を聞きました。すると、知り合いの中国人ツアーガイドさんから聞いた話をしてくれました。

そのガイドさんが言うには、沖縄は裕福層のリピーターが少ないのだそうです。その理由は、高級志向の人が買いたいものが少ない事と、高級ホテルに宿泊しても施設やサービスの質が価格に伴っていないというものです。

この意見は国内の観光客からも聞こえてくるようで、解決策としては人材育成や伝統工芸品、特産品のブランド化などが必要だと思います。

夏のリゾート期やプロ野球、マラソンなどのイベント、ゴルフ、修学旅行といった目的のはっきりした観光の獲得は出来ていますが、それ以外でも年間を通して何度でも訪れたいと思ってもらえるようにするにはどうしたらいいのでしょうか。

経済効果のことを考えると、カジノや高級リゾートの建設も有りなのかなとは思いますが、その反面で生まれ育った場所がどんどん開発されて変わってゆくことに寂しさも覚えます。自然は沖縄観光の大きな魅力だと思うので、今残された自然は出来る限り守ってほしいと思います。

私の父は京都出身なので、小さい頃から何度も京都に行っているのですが、京都も年間の観光客数が五五〇〇万人を超える観光地なので、いつ行っても街には人が溢れかえっています。変化していく沖縄に比べて、京都の街並みはほとんど変わることがありません。

それでも、季節を問わずたくさんの観光客が訪れるのはなぜなのか、父に聞いてみました。

すると「街は変わらないけど、その変わらない街が四季によって表情をかえる。だから春夏秋冬すべての景色を楽しみたいと思うんじゃないか？」と話してくれました。

また、年間を通して何かしらの祭りごとがあり、歴史を肌で感じることもできるのも魅力なのではないかと言っていました。

父は「沖縄も王朝文化の歴史がある。もっと歴史や伝統芸能や文化を前面に出した観光をしてもいいと思う。」と続けました。実際に首里城を始めとする9つのグスク及び関連遺産群が世界遺産に、慶良間諸島が国立公園に認定され、世界中から注目されています。

私は琉球舞踊を習っているのですが、ある旅行会社が主催する伝統芸能の舞台に何度か出演したことがあります。県外からのツアー客を対象にした公演なのですが、チケットは毎回完売でたくさんのお客さんでいっぱいになります。

舞台は冬場なので、天気が悪くとても寒い日にあたることがあります。そんな時に「せっかく沖縄に来たのに、あいにくの天気で残念だなと思ったけど、こんな素晴らしい芸能に触れられて来た甲斐があった」と言ってくくださる方がいらっしゃいました。

沖縄には何度も来ているけど、伝統芸能を生で見たのは初めてという方やこれからも

見に行きたいけれど、どこで見られるのか、と言った問い合わせも多いようです。

首里城でも、無料で鑑賞できるイベントがあるのですが、あまり認知されていないのかなと感じます。

今回調べてみて、首里城以外のグスクでも色々なイベントが行われていることがわかりました。県民の私にも魅力的に感じるものも多く、これがどれだけ県外にPR 出来ているのか気になりました。

沖縄と言えば、どうしても夏の観光のイメージが強いと思いますが、一年を通して楽しめるイベントを県外にアピールして、リゾート以外の沖縄観光をもっと広められたらいいと思います。そして、訪れた観光客にもう一度来てもらえるように、常に次のシーズンの観光を提案して、春夏秋冬で違った沖縄の魅力を発信できるようになれば良いと思います。

リゾート開発と自然、伝統、歴史の継承。まるで、対極にあるものを共存させて成り立っている沖縄の観光。

その将来がどうなっていくのか、今の私にはわかりませんが、訪れた人が「来てよかった」「また来たい」と思ってくれるように。

まだ沖縄を知らない人たちが「どんな島だろう？」と関心をもってくれるように。これからもっとこの生まれ島が輝くように、私にも出来ることから貢献していきたいと思います。